

UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

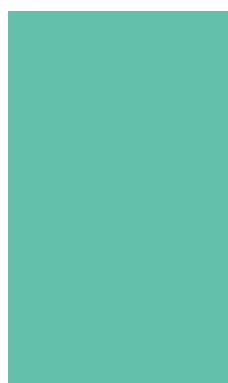
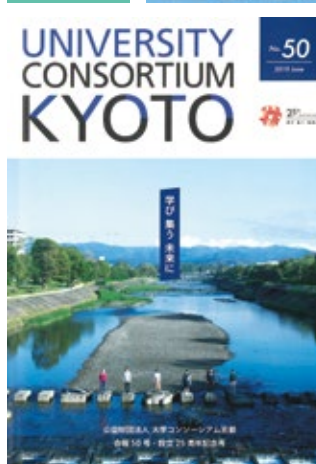
会報

2020.
Jan.
No. 51



25th Anniversary

学び 集う 未来に



特集 1
加盟校紹介 明治国際医療大学

特集 2
「起業」に挑戦する学生たち

特集 3
大学コンソーシアム京都設立 25 周年記念事業

明治国際医療大学

明治国際医療大学は1983年に日本初の4年制鍼灸大学として誕生し、今日では3学部4学科を有する保健医療分野の総合大学として地域に貢献しています。

南丹市の「知の拠点」としての役割を担うなど、さらなる期待が寄せられている明治国際医療大学。特色ある教育や今後の活動の展望について、矢野忠学長、樋口敏宏副学長、安田賢司アスリートサポートセンター長にうかがいました。



MEIJI UNIVERSITY OF INTEGRATIVE MEDICINE

伝統と革新の技術で健康まちづくりに貢献

Q 貴学の建学の精神のもとで取り組まれている教育活動と特徴についてお聞かせください。

〔矢野学長〕初代学長の河上邦治先生が掲げた「和の精神」は、3つの「和」を礎にしています。1つ目に、本学は「鍼灸」という東洋医学の一分野からスタートしていることから、「東洋と西洋との融和」、2つ目に、東洋医学は“人と自然との一体”という自然哲学をベースとした伝統医学であることから「人と自然との調和」。最後に、病に苦しむ人に寄り添うという意味で、「人と人との和」という3つの和です。この「和の精神」を建学の精神として、東西両医学を有機的に関連付けて社会に貢献できる医療人を育成しています。

1987年に附属病院を開院し、伝統医療である鍼灸においても、様々な病気に対して科学的根拠に基づいた医療が進んできたと言えます。こうした発展のなかで開設された本学の看護学部看護学科は、東洋医学的な知識や、ケアの技術を身に付けられる、全国でも本学だけの看護師教育カリキュラムになっています。



矢野忠 学長

Q 附属病院を含む施設のサポート体制の充実によって、選手がスポーツに打ち込むことができるのも貴学の大きな魅力ですね。

〔安田センター長〕これからの時代、「健康」が一つのキーワードになってきています。2015年に立ち上げたスポーツ振興プロジェクトの一環として開設した、アスリートサポートセンターでは、本学の医療関連施設を利用し、附属病院や



鍼灸施術所としての機能に加え、臨床研究施設としての機能も併せ持つ、附属鍼灸センターでの実習の様子

鍼灸、柔道整復などの各学科が一丸となり、アスリートをサポートしています。

17時から19時までセンターの専門教員が常駐し、予防治療や鍼灸治療、または柔道整復師の施術を受けるなどの診療を行います。学生の授業が終わってからの時間に対応することで故障予防の強化につながり、強化指定クラブの一つである女子柔道部が、創部3年にして全国大会で優勝するなどの実績につながっています。これこそがクラブの躍進の理由であり、本学にしかできない強みだと思います。



安田賢司 アスリートサポートセンター長

Q サポートが十分でないために、日本全国で故障や後遺症に苦しむアスリートが多い中、貴学の取組は意義が大きいものですね。

[安田センター長] 選手時代には限りがありますが、医療系の国家資格を取得後、選手時代の経験を活かしてセカンドキャリアとしてアスリートのサポートを志す学生が増えてきています。こうした将来を見据えた勉強ができるのも本学の特色でしょう。

Q 救急救命学科が、2017 年度に開設されました。この 2 年の間に、入学定員の 4 倍という高い出願率がある関心の高さを物語っていますね。

[樋口副学長] 救急救命学科は、国家資格である救急救命士を育成する学科です。特に、実習に力を入れ、1 年生の夏はプールと海で行う水難救助訓練で日本ライフセービング協会の方々に指導いただいています。また、冬山での訓練や学内にある都市型救助訓練専用の施設でロープを張り、建物から降り立つ訓練やガレキに埋まった車からの救助など、実践的な訓練を行っています。

これまで、他府県の施設を利用していた京都府警や全国の消防士が、本学の施設を活用するようになりました。実際に現場で働いておられる方々と訓練を共にする経験は将来のキャリア形成に大いに役立っていると感じています。



樋口敏宏 副学長・保健医療学部 救急救命学科長

Q 救急救命士の資格取得後、学生はどのようなフィールドで活躍するのでしょうか。

[樋口副学長] 現状では、約 7 割が消防署での勤務となります。3 年生の実習では、本学の救急車に救急救命学科の教員と学生が同乗して現場を体験する、より実践的なプログラムに加えて、3 年間の間に 3 回、スポーツボランティアに参加することを単位認定の条件にしています。南丹市のトライアスロン大会や、亀岡市のハーフマラソンにボランティアとして参加することで、「目の前の人倒れたときに自分はどう動くのか」を想定する訓練につながり、肉体的に強く、かつ人への共感力と優しい目線を合わせ持った、救急救命士を育成しています。

Q 今後民間救急救命士の運用は、どのような効果をもたらすのでしょうか。

[樋口副学長] 現在、現場から病院への搬送は消防が行っていますが、その後病院から違う施設へ運ぶ際の“施設間搬送”が消防にとってかなりの負担になっています。本学附属病院に EMT（救急救命士）部を設置して専用救急車を配置し、

附属病院から他病院や関連施設、また訪問診療先から病院への搬送、さらに治療後、他の施設への搬送までを救急救命士の資格を有する教員が乗車し行っています。

「地域医療」が大きなテーマになりつつあるなか、本学の取組は民間レベルでの救急車の利活用のモデルとなっています。

Q 貴学での今後の教育における展望、果たすべき役割などについてお聞かせください。

[矢野学長] これからのどのような社会が到来するのかわかり見極め、社会が必要とする、また社会から必要とされる人材の育成こそ、本学の教育活動における大きな課題だと思っています。

厚生労働省が提言する「2035 年、日本は健康先進国へ。」という目標のもと、人々が育ったまちで最期を迎えられるために、私たちはどのような自立支援ができるのか、病気にならないからだづくりや健康維持増進など、本学で学んだ知識や技術を用いて、地域の健康まちづくりに貢献することができる学生を送り出すことで、人々のニーズに応じたサービスを提供できると考えています。



キャンパスの一面にある都市型救助訓練専用施設



救急救命学科の実習の様子



明治国際医療大学ホームページ
<https://www.meiji-u.ac.jp/>

「起業に挑戦する学生たち」

1200年の歴史を誇る古都・京都。古き良きものを大切にする一方、革新的な気風を持ち合わせており、先進技術で時代の最先端を行く企業が数多く存在しています。また、京都には、多くの学生が暮らし学んでいます、高いベンチャー精神を持ち、「起業」に挑戦する学生もいます。

今回は、就職ではなく「社会起業家」という道を選んだ3人の大学生に、大学での学びから起業に至った経緯、今後の展望についてお聞きしました。



株式会社 RE-SOCIAL

左から山本海都さん、江口和さん、笠井大輝さん
共に、龍谷大学政策学部 の 4 年生。

2019 年 10 月に笠置町へ住まいを移し、11 月 29 日に
株式会社 RE-SOCIAL を設立。

現在は精肉加工施設建設に向けて活動中。

■ 今秋、獣害駆除で捕獲された鹿や猪の有効活用を目的とした精肉加工・流通の会社を立ち上げたそうですね。起業のきっかけを教えてください。

笠井：3 回生の授業で農作物や新芽を食べてしまう獣害被害が非常に深刻だということを知りました。日本政府が制定した報奨金制度等の取組によって、その被害は減少傾向にありますが、捕らえられた鹿や猪の多くが無残に捨てられている現場を目の当たりにしました。その時に抱いた「かわいそう、もったいない」という気持ちと、元々、企業への就職より大学時代に学んだこと活かした仕事をしたいという想いがあったので、起業を決意しました。両親が起業を応援してくれていることも大きかったです。親に反対された仲間もいましたが、説得して、ゼミの仲間3人で起業することになりました。

■ いわゆる「ジビエ肉」の加工、販売ですね。

山本：そうです。「ジビエ肉」はヨーロッパの食文化を中心に発展し、現在は日本でも愛好家が増えています。一方で、「固い、臭い、癖が強い」などのイメージも根強く、狩猟数が安定しないことや、鹿肉の場合、精肉加工をすると食べられる部分が一頭あたり 2 割と少ないことから、流通面ではまだ多くの課題が残されています。

笠井：起業しようと決めた頃、イスラム教徒の方々が必要とするハラール製品を扱っているお店が少なく困っているという話を聞きました。ハラールショップのある神戸へ調査に向かうと、店頭にはモモやロースといった日本人向けの部位だけでなく、出汁をとることを目的とした骨付きの鹿肉が多くなっていたんです。その時、日本にいるイスラム教徒の方はヤギに似た鹿肉を好んで食べること、生まれた国によっては固い部位の肉や内臓を余すことなく好んで食べていることを知りました。

山本：そこで、「もしハラールショップで販売が可能になる精肉加工技術を身に付けば、残渣（不要物）処理の課題もクリアでき、マーケティングの大きな強みになるのでは」と思い、ハラール認証の取得を視野に入れた事業計画を立てることになりました。

■ 加工の仕方が違うのですか？

江口：はい。精肉処理の方法だけではなく、設備にも決まりがあります。私たちは、日本で初めて鹿肉の精肉処理でハラール認証を取得された方が徳島県にいらっしゃることを知り、「なんでもお手伝いするので、解体から販売まで教えてください！」とお願いし、2019 年の夏休みに、住み込みで設備から内臓処理、精肉処理までの一通りを学んできました。

笠井：伝授していただいた加工方法「ハラールカット」は、生きたまま加工処理する必要があるため、殺すことなく捕獲しなければなりません。捕獲用の檻やワナを設置できること、鮮度を保つため加工処理工場が近くに建てられることを条件に検討を重ねるうち、京都府相楽郡の笠置町にたどりつきました。笠置町は自家消費を目的に畑で野菜を栽培している方が多いことから、国が発表する農作物被害には含まれていませんが、猟師の減少から被害が深刻化している地域でもあり、笠置町役場とも連携をとりながら工場の設置について進めているところです。

■ 創業のための資金はどうされているんですか？

山本：資金面については、自分たちの貯金の他に、ソーシャルファンド等の活用についても検討しています。僕たちは社会課題の解決について考えるあまり、資金調達のことは十分に考えきれていなかったのですが、ゼミの担当教員である深尾昌峰教授からは補助金の申請や融資のことなど、助言をいただき



徳島県で精肉処理について学んだ。



ハラルカットを習得することで、幅広い商品ラインナップを用意することができる。

ました。また、龍谷大学のREC（龍谷エクステンションセンター）には学生の起業支援のスペースがあり、卒業後も使用することができるので、今後もうまく活用していきたいと思っています。

今回の起業はゼミでの学びがきっかけだということですが、ゼミはどのような雰囲気なのでしょうか。

江口：私たちが在籍する政策学部は、地域における社会課題を見つけ、どのように解決していくかについて日々学んでいます。ゼミでは、「自分たちで考えて行動して、壁にぶつかったら初めて相談する」というスタンスなのですが、先生は「学生

たちがやりはじめるまで」をセッティングしてくれています。これまでの人生で、主体的にテーマ設定をして学ぶという経験はありませんでしたが、政策学部に入って考え方が変わったと感じています。

■ それでは最後に今後の展望について聞かせてください。

笠井：いつか、ふるさと納税の返礼品で僕たちの加工したジビエ肉を提供できる日がくると嬉しいです。また、栄養面で非常に優れている鹿肉を、ドッグフードへ加工することも考えています。僕たちの取組が獣害被害に苦しむ地域に対して、課題解決のロールモデルになるよう励みたいです。



笠置町で行われたイベントにて、鹿肉と猪肉の串焼きを販売。

学生の起業を支援する～京都経済センター～

2019年3月、四条室町にオープンした京都経済センターには、大学コンソーシアム京都に加盟する経済団体である、京都商工会議所、京都経営者協会、一般社団法人 京都経済同友会、公益社団法人 京都工業会が入っています。今回は、京都経済センターに新たに開設された施設や創業支援についてご紹介します。

KOIN (Kyoto Open Innovation Network)

京都府、京都市及び京都の産業界のオール京都体制により設立された「一般社団法人 京都知恵産業創造の森」が運営する京都経済センター3階のオープンイノベーションカフェ。起業家と学生の交流スペースにもなっています。ご利用には会員登録が必要です。

<https://open.kyoto/>

創業塾・創業準備セミナー

これから創業を目指す方対象に、京都商工会議所が開講。創業計画書づくりを通じて創業に関する基礎知識のほか、事業を成功させるためのノウハウ、知恵を習得することができます。

京商フューチャーセッション

テーマ分野で活躍している起業家等による講演の後、ファシリテーターの進行のもと参加者同士がグループ形式で未来志向での対話を行い、気づきやアイデアを生み出し、相互啓発・研鑽、交流を図ります。



KOIN オープンイノベーションカフェ

さらに知りたい方はこちら！

■ 京都スタサポ

京都市内で創業したい方を応援する京都商工会議所が運営する情報サイト。セミナーやイベントの情報が満載です。

<https://www.stasapo.kyoto/>

■ 京都経済センター

京都市下京区四条通室町東入
函谷鉾町78番地
(京都市営地下鉄烏丸線「四条駅」
北改札出てすぐ)

<https://kyoto-kc.jp/>



大学コンソーシアム京都設立 25 周年記念事業

第一部：講演会 ～グローバル化する社会と日本の大学の行方～ 京都精華大学 ウスビ・サコ学長



京都精華大学学長 ウスビ・サコ氏

公益財団法人大学コンソーシアム京都は 2019 年に設立 25 周年を迎えました。設立当初と比較すると、高等教育を取り巻く環境は大きく変化しており、18 歳人口が急減する一方、長寿化が進行し、人生 100 年時代の到来と言われています。また、技術革新がめざましく、AI や IoT などの分野が急速に進化し、society5.0 の到来が目前まできている状況です。このような中、日本の高等教育には、困難な課題をグローバルな視野をもって解決できる人材の養成や、教育研究資源の活用による社会貢献に期待が寄せられています。本財団 25 周年を記念した講演会では、京都精華大学学長を務められているウスビ・サコ氏から、ご自身の留学経験を踏まえながら、グローバル化する社会における日本の大学の課題についてご講演いただきました。

恐れず「意見を言い合う」ことが国際感覚を身につける第一歩

マリ共和国の高校を卒業後、建築を学ぶために中国と日本へ留学しました。中国では「留学生ディベート」を企画し、各国の留学生と議論したことで多様な視点を知り、国際感覚を学ぶことができたと思っています。しかし、日本では自分の意見を言うタイミングが分からず悩みました。ケンカをするチャンスも少ない。「意見を言わないことが美德です」と言う方もいますが、意見を言い合って歩み寄ることで、初めて本当の協調性が身に付くのではないのでしょうか。

外国人と日本人が相互理解を進めるための先陣に

留学当時、私は日本の社会で日本人と外国人が相互に理解しあえる状況をつくりたいと思い、交流のためのボランティアサークルを立ち上げました。国際交流情報誌の発行や日本語教室の開設の他に、留学生が母国語で相談できるホットラインを設置するなど、留学生にとって必要だと思ったことを行動に移していきました。学生の立場ではありましたが、グローバル化に向けた様々な取組を行うことができました。



グローバル人材を育成するために

私はマリ共和国で生まれ、中国、日本に留学し、本来は帰国して公務員になるはずが、期せずして京都の大学で学長として、日々リーダーシップを発揮する立場にいます。生まれ育った環境がどうであれ、誰でもグローバルリーダーになる可能性があるのです。ここで言う「グローバル化」とは、一国対他国の価値基準で見る「国際化」とは異なり、国境にとられない、つまり地球規模で考え行動できるかどうかということだと私は考えています。それにはまず、主体性、積極性やチャレンジ精神を磨く前に「自分は何者なのか」を知ることが重要です。そして、たとえ小さなことでも日常のなかにある“異文化”に気づき、理解する。「空気を読む」ばかりではなく、自分の意見も主張できる「主体性」と、他者を理解し、折り合いをつけることのできる「協調性」を両立させ、他者と共生できる人こそ、真に求められるグローバル人材ではないのでしょうか。

我々はそうしたことを学生に教えていかなければなりません。

大学コンソーシアム京都に期待すること

グローバル人材の育成について、国からは非常に高いレベルが求められています。しかし、大学は国主導の政策に合わせた個性の乏しい取組をするだけでよいのでしょうか。大学コンソーシアム京都には、日本初の大学コンソーシアムとして蓄積してきたネットワークやノウハウで、加盟校の個性を生かした教育研究を実現する支援をしてほしいと思います。また、大学共同体の創造や、大学間のコラボレーションによる教育研究のイノベーション、加盟大学のダイバーシティ促進、留学生支援サービスの共通化など、これからは京都の発展に向けた多くの貢献を期待しています。

記念式典の後には、本財団の運営にご尽力いただいた加盟校、関係団体の皆様をお招きし、懇親会と同窓会を開催しました。

記念懇親会

懇親会では、当財団顧問である京都市長 門川大作様、京都府副知事 山内修様にご祝辞を頂き、多様な大学が集積し、多くの学生が学ぶ京都の優位性を活かしながら、本財団が、人口減少・高齢化を迎える社会の中で生まれる新しい課題に挑戦していくことへの期待が述べられました。また、最後に、当財団理事長の仲谷善雄から、「京都の大学が連携して学生が育つきっかけと、学ぶ環境を生み出すことが重要であり、改めて、四半世紀前に自主的にコンソーシアムという組織を設立した先人の想いを引き継ぎながら、世界に貢献する人材の輩出に努める」との決意が述べられました。



大学コンソーシアム京都
顧問
京都市長 門川大作様



大学コンソーシアム京都
理事長 仲谷善雄

職員同窓会

同窓会では京都・大学センター時代から出向され、現在の大学コンソーシアム京都の基礎を作られた、学校法人立命館理事長 森島朋三様より、法人格取得当時の様子について振り返りながら、「今後も全国に先駆けた取組に挑戦しながら他の地域とは違う組織として発展してほしい」と激励のことばをいただきました。

限られた時間ではありましたが思い出話に花が咲き、旧交を深める機会となりました。



学校法人立命館
理事長 森島朋三様



Report

第16回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム開催

2019年8月31日、9月1日、熊本市の熊本学園大学（幸田亮一学長）において、「大学コンソーシアムとともに始まる大学づくり」をメインテーマとして、「第16回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム」が、全国大学コンソーシアム協議会（川野祐二・仲谷善雄代表幹事）、一般社団法人大学コンソーシアム熊本（半藤英明代表理事）の共催で開催されました。

今年で16回目を迎えた同フォーラムでは、それぞれの地域の知の集合体とも言える大学コンソーシアムが議論すべき内容、また、果たすべき役割を考究すべく全国各地の高等教育機関、大学コンソーシアム関係者、行政等から297名の参加者が集まりました。

1日目は、大学コンソーシアムの運営に従事する事務局関係者が、日々感じている「コンソーシアムならではの」課題を共有しながら、その解決方法をともに考えるプレイベントをフォーラム開会前に行いました。

基調講演では、熊本県立劇場館長 姜尚中氏を講演者に迎え、「大学コンソーシアムとキャンパスアジアの可能性」をテーマとし、ご講演いただきました。

またシンポジウムでは、半藤英明氏（大学コンソーシアム熊本代表理事・熊本県立大学 学長）をコーディネーターに迎え、甲斐隆博氏（熊本経済同友会代表幹事）、小野泰輔氏（熊本県副知事）、中山峰男氏（崇城大学理事長・学長）らシンポジストによる報告とディスカッションを行いました。

続いて行われた、文教行政報告では、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室長 平野博紀氏より、高等教育



政策の動向についての報告があったほか、シンポジウムと並行して実施されたポスターセッションでは、20団体（同協議会加盟組織19機関と企業1社）の取組が展示され、出展者と参加者との積極的な交流の場面も見られました。

2日目の分科会では、「大学コンソーシアムにおけるFD・SD研修」、「障がい学生支援と大学コンソーシアム」、「危機管理と大学の地域貢献－震災対応を事例として－」「人・大学・まちの成長、発展に繋げる大学コンソーシアムの活動とは」「地域活性化人材をどう育成するか」の5分科会を実施し、実践事例報告や参加者との意見交換等を展開しました。

次回フォーラムは、2020年9月12・13日に大阪で開催されます。詳細は、大学コンソーシアム京都のホームページにて2020年6月頃に発表する予定です。

Information

大学・地域連携ポータルサイト

GAKUMACHI STATION（がくまちステーション）開設！

当財団では、大学・学生・地域との連携した活動を支援し、学生の学びと成長、地域の活性化を図ることを目的に、サークルや学生グループによるまちづくり活動を支援する「学まちコラボ事業」や大学を挙げた地域連携の取組を支援する「学まち連携大学」促進事業を京都市との協働で進めてきました。また、都市にかかわる課題について学生が調査・研究した成果を政策提案する「京都から発信する政策研究交流大会」の開催や、加盟校におけるまちづくり事例の発信など、様々な地域連携についての情報発信を行っています。

2019年度に地域連携にかかわる幅広い情報を網羅したサイトを開設し、大学・学生と地域との連携活動の活性化を図っています。みなさま、ぜひご活用ください。



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下 キャンパスプラザ京都内
TEL：075-353-9100（代表）
FAX：075-353-9101
E-mail：pr-ml@consortium.or.jp
WEB サイト：http://www.consortium.or.jp/



大学コンソーシアム京都

